

原の内A遺跡第4次発掘調査説明資料

公益財団法人山形県埋蔵文化財センター 2022年11月12日

調査要項

遺跡名	原の内A遺跡(県遺跡番号 212-029)
所在地	山形県尾花沢市鶴子字原の内地内
時代・種別	縄文・古代
起因事業	農地整備事業(経営体育成型)鶴子六沢地区
調査依頼者	村山総合支庁産業経済部北村山農村整備課
調査機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
調査指導	山形県観光文化スポーツ部文化財活用課
調査協力	鶴子六沢土地改良区 尾花沢市教育委員会
現地調査	令和4年10月3日から11月30日まで
調査面積	690㎡
調査担当者	専門調査研究員 植松暁彦(現場責任者) 主任主査 氏家信行
検出遺構	竪穴住居堀 土坑 柱穴 谷跡 風倒木痕
出土遺物	縄文土器 石器(石鏃・石ベラ・石錐・石匙・搔器・磨製石斧・凹石・磨石)

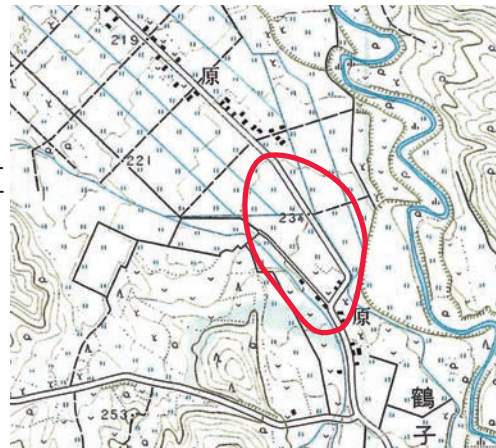


図1 遺跡位置図(1/25,000)

1 調査の概要

今回の発掘は、原の内A遺跡の昭和55年(1981)、昭和57年(1983)、昭和62年(1988)に続き、第4回目となります。これまでの調査では、縄文時代と古代の集落跡が発見され、特に今回の第4次調査区の西約50mに近接する第3次調査区では舟形町西ノ前遺跡の国宝土偶と類似した土偶が出土しました。

今回の第4次調査は、農地整備事業の用排水路工事に伴い、遺跡の東縁部が初めて調査され、南北に細長いL字形の調査区です。

調査区では、中央部で縄文時代の大谷が発見され、それを境に南側で縄文時代中頃の竪穴住居跡や土坑、柱穴、谷跡などが発見され、多量の土器や石器が出土しました。大谷の北側は、土坑や柱穴があり、出土遺物から縄文時代終わり頃の集落跡が確認されました。



2 見つかった遺構と遺物

第4次調査では、調査区中央部で幅約16mの縄文時代のSG20大谷が発見され、地層からは現代地形も影響を受けたようです。

そのSG20大谷の南側の高地では、ST5・ST6の竪穴住居跡、SX7風倒木痕などが発見され、多量の土器群や頁岩製の狩猟・加工具の石器と共に、凹石や磨石など礫石器も出土しました。また、ST5・6・SK13の重なりから3回以上の建て替えが認められます。また、その東側では集落を区切るSG15・16・17の小谷跡があり、層位的な遺物の出土状況から長期間使われた「捨て場」の用途が考えられました。これらは、縄文時代中期前～中葉(約5,000年前)が主体を占めます。

一方、調査区北側では、土坑や柱穴が単発的に検出され、その埋土から縄文時代晩期中葉(約2,500年前)の土器が出土しました。

3 まとめ

第4次調査区は、遺跡範囲の南東部縁にあたり、調査区南側は近接する第2・3次調査で明らかな縄文時代中期の集落に続き、概ね約150m以上の集落規模が推測されます。

調査区では、竪穴住居跡や土坑が複数発見され、周辺に広がる様子がうかがえます。また、住居の建て替えなどからは、集落が長期間に渡り存続し、凹石・磨石の多さからは、当時周辺に豊富な堅果類があった可能性があります。そして、集落の東端には小谷が数条あり、集落とほぼ同時期に捨て場として機能し、徐々に埋没し平地化するようです。

一方、調査区中央部のSG20大谷を境に北側は、低地で縄文時代晩期の単発的な土坑や柱穴があり、南側の高地の同中期より時期が後出で、大谷による段丘面形成の差異や、縄文終末期の環境変化の影響も推測されます。



遺構検出の全景(南より)



1区 ST 5・6、SX 7の遺構検出状況（南より）



3区南半 SG16 小谷の土層断面（南東より）



3区中央 SG20 大谷の検出状況（南東より）



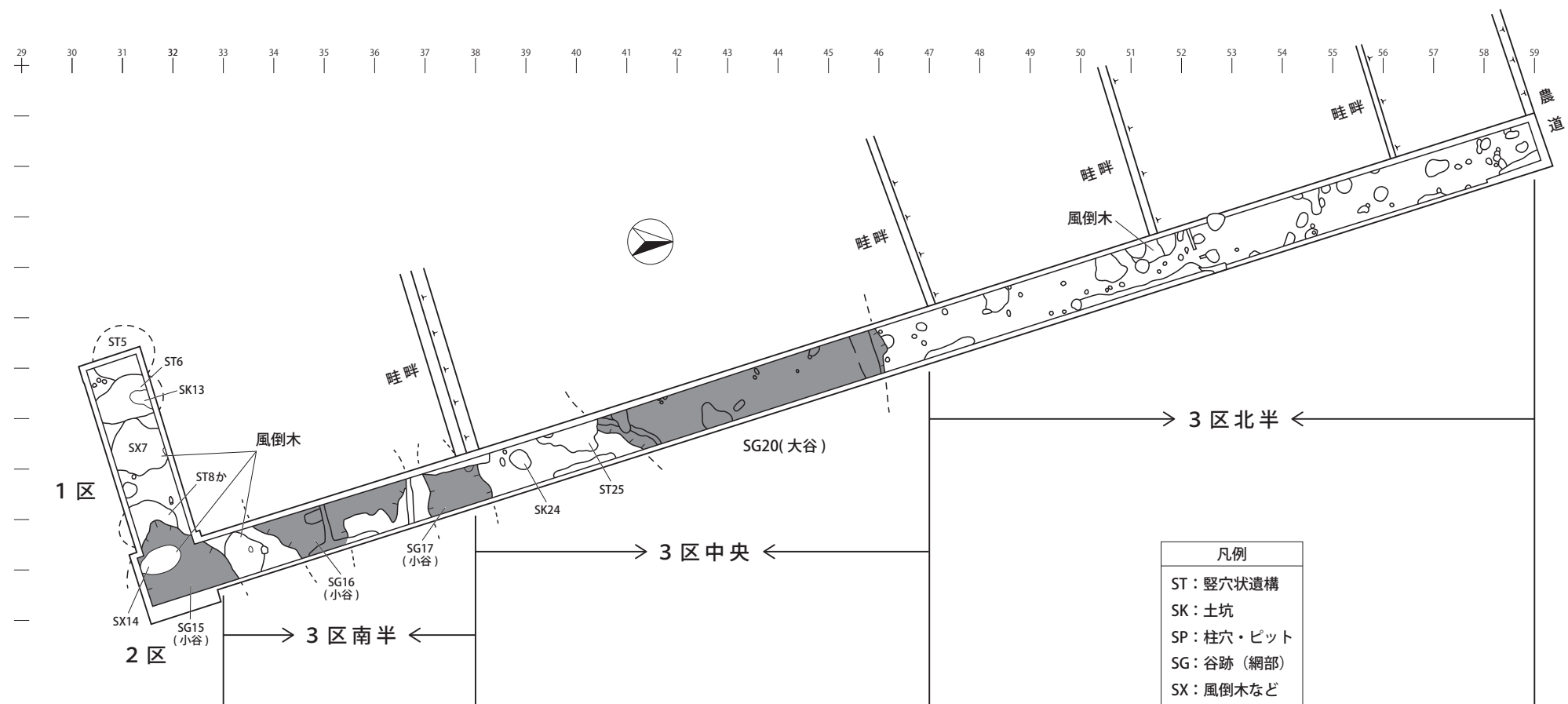
3区北半の遺構精査状況（北より）



1区 ST 5・6、SX 7の遺構出土状況（南より）



1区 ST 6 中層遺物出土状況（南より）



1区 ST 6の遺物精査状況（東より）



1区 ST 6 浅鉢出土状況（東より）



1区 ST 6の凹石出土状況（南より）



1区 SX 7の石錐・磨石出土状況（南より）